

## 保育士養成課程における施設実習の現状と課題

Current status and issues of the practical training as part of the childcare worker development process at welfare facilities

石田 慎二\*・西村 真実\*\*

Shinji Ishida・Mami Nishimura

This paper investigated the degree to which the objectives of the practical training as part of the childcare worker development process at welfare facilities for persons and children with disabilities were achieved. Results showed that such training was extremely robust and that objectives relating to content which forms the foundations for deepening of practical training, such as an understanding of practical training facility and users, consideration of safety and hygiene, and communication and interaction with users, were achieved to a certain degree. Conversely, it was shown that deep understanding in terms of user needs and support programs, linkages with communities and families, and the professional ethics of facility personnel was not attained. Further, while the analyses comparing facility type and target group revealed no differences on most items, differences were observed on a number of items, including communication with users and the qualities of support programs developed to suit user characteristics.

### 1. はじめに

保育士養成課程の保育実習は、必修科目である「保育実習Ⅰ」（実習・4単位：保育所実習2単位・施設実習2単位）と、必修選択科目としていずれかを選択する「保育実習Ⅱ」（実習・2単位：保育所実習）、「保育実習Ⅲ」（実習・2単位：保育所以外の施設実習）が設定されている。これは、2019年度より施行される新たな「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」でも変わらない。

帝塚山大学現代生活学部こども学科（以下「本学」とする。）において、保育士養成課程の保育実習Ⅰの施設実習に位置づけられる科目が施設実習Aである。施設実習は、保育所以外の居住型児童福祉施設等および障害児通所施設等において実習を行うことになっており<sup>1)</sup>、本学では障害児入所施設、児童発達支援センター、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所の4つの施設種別で実習を実施している。保育実習Ⅰの施設実習を障害児者福祉施設<sup>2)</sup>のみで実施しているのが本学の特徴である。

保育士養成課程における施設実習を障害児者福祉施設での実習に焦点を当てて検討した先行研究としては、田中・須河内（2004）、尾島・小野・杉本（2005）、小野・尾島（2006）、岡部・齋藤（2010）、松倉・若林（2012）、若林・松倉（2012）、隣谷（2013、2015）、野田（2015）、八田・大下・金森（2015）などがある。これらの先行研究において比較的多いのが、施設実習における障害児者あるいは障害児者福祉施設のイメージの変化に関する研究である。

たとえば、岡部・齋藤（2010）は、実習前後にアンケート調査を行い、知的障害児者に対する偏見的態度の変容に施設実習が有効に機能していることを明らかにしている。若林・松倉（2012）、松倉・若林（2012）では、実習後のアンケート調査の結果から、施設実習によって障害者のイメージが変わり、それに伴って障害者支援施設のイメージがプラスのイメージへと転換

\* こども学科 准教授

\*\* こども学科 准教授

した学生が多いことを明らかにしている。尾島・小野・杉本（2005）、小野・尾島（2006）は、施設実習後のアンケート調査の結果から、実習後は障害児者の否定的な側面への着目が減少し肯定的な側面への着目が増加すること、さらに講義による知識教示と実習による接触体験により障害児者への肯定的な意識変化に至ったことを明らかにしている。田中・須河内（2004）は、施設実習における知的障害児者への接触経験によって抵抗感や恐怖感は減少し偏見解消の程度も高くなるが、必ずしも具体的な状況のもとで態度がよりポジティブな方向に変容するわけではないことを明らかにしている。隣谷（2013、2015）は、施設実習における障害児者に対する捉え方の変化の過程について、とくに絵本・紙芝居などの児童文化財を用いた活動がどのような影響を与えているのかについて分析している。

このように障害児者福祉施設での施設実習に関する先行研究では、施設実習が障害児者あるいは障害児者福祉施設のイメージを肯定的に変化させる効果があることは明らかにされているが、保育士養成課程の施設実習本来の目的がどのくらい達成されているかについて検討している研究は少ない。

したがって、本稿では、障害児者福祉施設での施設実習において保育士養成課程の施設実習の目的がどのくらい達成されているかを明らかにすることを目的とする。さらに、実習施設種別で施設実習に目的の達成度に差があるか否かについても検討する。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

本学こども学科で開講されている施設実習Aを2017年度に履修した学生90名を対象とした。なお、その内訳は、障害児入所施設が21.1%、児童発達支援センターが3.3%、障害者支援施設が45.6%、指定障害福祉サービス事業所が30.0%であった。

対象別では、障害児施設（障害児入所施設、児童発達支援センター）が24.4%、障害者施設（障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所）が75.6%であった。形態別では、入所施設（障害児入所施設、障害者支援施設）が66.7%、通所施設（児童発達支援センター、指定障害福祉サービス事業所）が33.3%であった。

### 2. 調査方法

施設実習Aの実習終了後に自分自身の実習を振り返って「施設実習A 事後アンケート」への回答を求め、本学こども学科の実習センターへ提出させた。2017年度に施設実習Aを実施した90名の学生のうち、すべての学生から回収した。

### 3. 調査項目の設定

本学の施設実習Aの実習のねらいと内容は、全国保育士養成協議会が刊行した『保育実習指導のミニマムスタンダード』を参考にして設定されている（表1）。本調査は、この実習の内容に基づき21の質問項目を設定した。それぞれの質問項目について、実習の自己評価を「1. 全くできなかった」「2. あまりできなかった」「3. ややできた」「4. とてもできた」の4段階で測定した。

また、実習の充実度についても「1. 全く充実していなかった」「2. あまり充実していなかった」「3. やや充実していた」「4. とても充実していた」の4段階で測定した。

#### 4. 倫理的配慮

この事後アンケートの結果については、施設実習の事前事後指導および実習内容の改善のための調査研究に使用すること、個人の回答は特定されないように分析を行うことを説明したうえで回答を求めた。また、回答内容は保育実習事前事後指導および施設実習Aの評価には影響しない旨を説明した。

表1 施設実習Aのねらいと内容

<p>1. ねらい 保育所以外の児童福祉施設、障害者福祉施設などの生活に参加し、利用児者への理解を深めるとともに、各施設の機能とそこでの保育士の職務について学ぶ</p> <p>2. 内容</p> <p>1) 実習施設についての理解を深める</p> <ul style="list-style-type: none"><li>①実習施設の概要を理解する</li><li>②実習施設の設立理念と養護や支援の目標を理解する</li></ul> <p>2) 施設の状況や一日の流れを理解し、参加する</p> <ul style="list-style-type: none"><li>①実習施設の生活に参加し、一日の生活の流れを理解する</li><li>②利用児者や保育士とともに生活し、施設の生活状況を理解する</li></ul> <p>3) 利用児者のニーズを理解する</p> <ul style="list-style-type: none"><li>①観察を通して、施設を利用する児童や成人の実態を理解する</li><li>②利用児者と生活をともにし、積極的に関わることを通して、そのニーズを理解する</li></ul> <p>4) 支援計画について理解する</p> <ul style="list-style-type: none"><li>①支援計画の意味を理解し、施設全体の援助の実態を学ぶ</li><li>②年齢・発達その他個人の特性に応じた支援計画のあり方を学ぶ</li></ul> <p>5) 養護技術・援助技術を学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"><li>①保育士の援助の実際を通して、養護技術や援助技術を学ぶ</li><li>②生活の一部を実際に担当し、利用児者の養護や援助を理解する</li><li>③利用児者の個性に配慮した養護や援助のあり方を学ぶ</li></ul> <p>6) 職員間の役割分担とチームワークについて理解する</p> <ul style="list-style-type: none"><li>①職員間の引継ぎなどにふれ、一貫性・継続性に配慮した養護の視点を学ぶ</li><li>②異業種間の業務内容や役割にふれ、チームワークのあり方について理解する</li></ul> <p>7) 施設・家庭・地域社会との連携について理解する</p> <ul style="list-style-type: none"><li>①施設と家庭との連携の実態にふれ、そのあり方について理解する</li><li>②保育士と保護者との関わりについて理解し、その連携のあり方を学ぶ</li><li>③地域における子育て支援事業の実態について理解する</li><li>④地域における社会資源について理解する</li></ul> <p>8) 利用児者の最善の利益を具体化する方法について学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"><li>①保育士と利用児者との日常の関わりを通して、利用児者にとってよりよい生活や関わりのあり方を学ぶ</li><li>②利用児者の最善の利益を追求する施設全体の取り組みについて学ぶ</li></ul> <p>9) 保育士の職業倫理を理解する</p> <ul style="list-style-type: none"><li>①守秘義務の遵守などがどのようになされているかを理解する</li><li>②個人のプライバシーが、具体的にどのように保護されているかを理解する</li></ul> <p>10) 安全および疾病予防について理解する</p> <ul style="list-style-type: none"><li>①施設全体の安全・衛生に対する仕組みと個々の配慮を理解する</li><li>②一人ひとりの利用児者に対する安全・衛生の配慮を理解する</li></ul>
--

### III. 研究結果

#### 1. 施設実習の充実度

施設実習の充実度は、「とても充実していた」が79.3%で最も多く、次いで「やや充実していた」が19.5%、「全く充実していなかった」が1.1%であった。「とても充実していた」が約8割であり、さらに「やや充実していた」を合わせると98.8%となっており、施設実習の充実度が非常に高いことが示された。

## 2. 施設実習の自己評価の平均値

表2は、施設実習の自己評価の平均値を高い順に示したものである。これみると、上位5項目は、高い順に「実習施設の一日の生活の流れ」(3.88)、「利用児者とのコミュニケーション」(3.66)、「利用児者との積極的な関わり」(3.61)、「利用児者の生活状況、活動状況」(3.50)、「一人ひとりの利用児者に対する安全・衛生の配慮」(3.50)であった。

下位5項目は、低い順に「施設と家庭との連携のあり方」(2.69)、「施設と地域社会との連携のあり方」(2.82)、「施設職員の職業倫理」(2.89)、「利用児者のニーズの理解」(3.08)、「支援計画の意味・施設全体の援助の実態」(3.09)であった。

表2 施設実習の自己評価

項目	平均値
実習施設の一日の生活の流れ	3.88
利用児者とのコミュニケーション	3.66
利用児者との積極的な関わり	3.61
利用児者の生活状況、活動状況	3.56
一人ひとりの利用児者に対する安全・衛生の配慮	3.50
実習施設の概要	3.46
施設全体の安全・衛生に対する仕組みと個々の配慮	3.43
利用児者にとってより良い生活や関わりのあるあり方	3.39
利用児者に対する支援方法	3.38
施設職員の職務	3.36
施設を利用する利用児者の実態	3.35
実習施設の設立理念と支援の目標	3.32
利用児者の個別性に配慮した支援	3.28
職員間の役割分担とチームワーク	3.26
利用児者の特性に応じた支援計画のあり方	3.24
利用児者の最善の利益を追求する施設全体の取り組み	3.23
支援計画の意味・施設全体の援助の実態	3.09
利用児者のニーズを理解	3.08
施設職員の職業倫理	2.89
施設と地域社会との連携のあり方	2.82
施設と家庭との連携のあり方	2.69

## 3. 施設の対象別、形態別の自己評価の平均値

表3は、実習施設の対象別（障害児施設、障害者施設）、形態別（入所施設、通所施設）による自己評価の平均値の違いを示したものである。t-検定の結果が有意であった項目のみ平均値を示し、大きい方の値をイタリック体にした。

対象別では、「利用児者とのコミュニケーション」の項目のみに有意な差がみられ、障害児施設のほうが障害者施設よりも自己評価の平均値が有意に高かった。形態別では、「利用児者の特性に応じた支援計画のあり方」「利用児者にとってより良い生活や関わりのあるあり方」「施設職員の

職務」の項目において有意な差がみられ、それぞれに項目において入所施設のほうが通所施設よりも自己評価の平均値が有意に高かった。

表3 施設の対象別、形態別の自己評価

項目	対象別		形態別	
	障害児施設	障害者施設	入所施設	通所施設
実習施設の概要				
実習施設の設立理念と支援の目標				
実習施設の一日の生活の流れ				
利用児者の生活状況、活動状況				
施設を利用する利用児者の実態				
利用児者のニーズを理解				
支援計画の意味・施設全体の援助の実態				
利用児者の特性に応じた支援計画のあり方			3.29	3.13
利用児者に対する支援方法				
利用児者との積極的な関わり				
利用児者とのコミュニケーション	3.86	3.59		
利用児者の個別性に配慮した支援				
職員間の役割分担とチームワーク				
施設と家庭との連携のあり方				
施設と地域社会との連携のあり方				
利用児者にとってより良い生活や関わりのあるあり方			3.45	3.27
利用児者の最善の利益を追求する施設全体の取り組み				
施設職員の職務			3.43	3.20
施設職員の職業倫理				
施設全体の安全・衛生に対する仕組みと個々の配慮				
一人ひとりの利用児者に対する安全・衛生の配慮				

#### IV. 考察

##### 1. 施設実習の充実度に関する考察

施設実習の充実度は非常に高いことが示された。この要因としては第1に施設実習の自己評価の高さが考えられる。表2に示したように、21項目中18項目において施設実習の自己評価の平均値が3以上となっている。つまり、施設実習の多くの内容において「できた」と自己評価しており、これが施設実習の充実度の高さにつながっていると考えられる。

第2の要因としては、障害者観の変化が考えられる。前述した先行研究において実習生の障害児者に対する偏見の態度の変容に施設実習が有効に機能していることが示されているが、本学の実習生も施設実習を通して障害者観がポジティブに変化したことで施設実習の充実度が高くなったと考えられる。

第3の要因としては、実習経験が考えられる。本学では、施設実習Aを3年次後期の2月～3月に実施している。実習生はそれまでに保育所実習を経験するだけでなく、多くの実習生は幼稚

園または小学校での教育実習を経験している。さらに、小学校教諭免許希望者は介護等体験も体験している。このような実習経験等により実習に対する心構えや実習記録の書き方等が身につけており、円滑に実習を行うことができたことで施設実習の充実度が高くなったと考えられる。

## 2. 施設実習の自己評価に関する考察

施設実習の自己評価の平均値をみると、第1に「実習施設の概要」「実習施設の一日の生活の流れ」「利用児者の生活状況、活動状況」といった項目の自己評価が高く、施設実習において学びを深めていく上で前提となる実習施設、利用児者の理解はある程度できていると考えられる。

第2に「利用児者とのコミュニケーション」「利用児者との積極的な関わり」といった項目の自己評価が高く、施設実習において利用児者との関わりが大きな学びとなっていることがわかる。その一方で、「利用児者のニーズの理解」「利用児者の特性に応じた支援計画のあり方」「利用児者の最善の利益を追求する施設全体の取り組み」といった項目の自己評価は高くなく、10日間という短い実習期間では利用児者への支援について深く理解するまでには至っていないと考えられる。

第3に「一人ひとりの利用児者に対する安全・衛生の配慮」「施設全体の安全・衛生に対する仕組みと個々の配慮」といった項目の自己評価が高く、安全面・衛生面を意識して実習に取り組んでいたことがうかがえる。また、本学の施設実習の時期である2月～3月は、インフルエンザや感染症が流行しやすく、施設において衛生管理の意識がとくに高まっていると考えられる時期であるため、施設職員の衛生管理対策を日常的に経験したことも自己評価が高くなった要因と考えられる。

第4に「施設と家庭との連携のあり方」「施設と地域社会との連携のあり方」といった項目の自己評価が低く、家庭や地域社会との連携のあり方については施設実習において理解を深めることができていないことがうかがえる。実習生はまず施設の生活の流れや利用者との関わりを意識して取り組むため10日間という短い実習期間において家庭や地域社会との連携にまで意識が向いていないと考えられる。また、実習において家庭や地域社会との連携の場面を目にする機会がほとんどないということも考えられる。施設実習において家庭や地域社会との連携のあり方についてどのように理解を深めていくかについては今後の課題といえる。

第5に「施設職員の職業倫理」の項目の自己評価が低く、施設実習において施設職員の職業倫理について理解を深めることができていないことがうかがえる。しかし、これは施設実習において職業倫理を理解できなかったということではなく、「職業倫理」という言葉が抽象的で、この言葉自体の理解が不十分なため自己評価が低くなっている可能性もある。したがって、「施設職員の職業倫理」の学びを深めていくためには事前指導の授業において職業倫理の具体的な内容についてしっかりと説明するなど、事前学習の内容を検討する必要がある。ただし、表1で示した施設実習Aのねらいと内容のように、職業倫理の項目を「守秘義務の遵守などがどのようになされているかを理解する」「個人のプライバシーが、具体的にどのように保護されているかを理解する」と細かく分けて質問していれば自己評価は変わった可能性があるため、今後、同様の調査を実施する際にはこのような調査項目の検討も必要である。

## 3. 施設の対象別、形態別の自己評価に関する考察

対象別では、「利用児者とのコミュニケーション」において障害児施設のほうが障害者施設よりも自己評価の平均値が高かったが、この要因としては保育所実習等においてこれまで子どもと

の関わりを経験していたことにより障害児施設のほうがスムーズにコミュニケーションを図ることができたと考えられる。逆に障害者施設では保育士の仕事のイメージから大人とのコミュニケーションに戸惑いがあったことなどが考えられる。

形態別では、「利用児者の特性に応じた支援計画のあり方」「利用児者にとってより良い生活や関わりのあるあり方」「施設職員の職務」において入所施設のほうが通所施設よりも自己評価の平均値が有意に高かったが、この要因としては入所施設のほうが通所施設よりも生活全般を体験できることが考えられる。通所施設、とりわけ指定障害福祉サービス事業所では利用者とともに作業することが多く、生活全般の支援や職員の職務がみえにくいということが考えられる。したがって、事前指導の授業において通所施設の位置づけや通所施設での職員の職務などについてしっかりと説明するなど、事前学習の内容を検討する必要がある。

## V. おわりに

本稿では、障害児者福祉施設での施設実習において保育士養成課程の施設実習の目的がどのくらい達成されているかを検討してきた。その結果、施設実習において学びを深めていく上で前提となる実習施設、利用児者の理解、安全・衛生の配慮、さらに利用児者とのコミュニケーション、関わりについてはある程度、達成できていることが明らかになった。その一方で、利用児者のニーズや支援計画、地域や家庭との連携、施設職員の職業倫理などについては深く理解するまでには至っていないことが明らかになった。

保育士養成課程の施設実習は10日間という短い期間であり、この短い期間でどこまで深い学びができるかは事前指導が果たす役割が大きい。今回の調査結果は事前指導の内容に関して示唆を与えるものも多くあったため、この結果をもとに事前指導の内容についてさらに検討を重ねていきたい。

## 注

- 1) 「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」(雇児発0808第2号)では、保育士養成課程の保育実習Ⅰの施設実習の施設種別として「乳児院、母子生活支援施設、障害児入所施設、児童発達支援センター(児童発達支援及び医療型児童発達支援を行うものに限る)、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所(生活介護、自立訓練、就労移行支援又は就労継続支援を行うものに限る)、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設、児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園」が規定されている。
- 2) 本稿では、障害児入所施設、児童発達支援センター、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所の4つの施設種別をまとめて「障害児者福祉施設」と表記する。

## 文献

- 隣谷正範：保育学生の知的障害者に対する捉え方の変化：障害者支援施設での施設実習を焦点として、松本短期大学研究紀要、22、pp.3-11、2013
- 隣谷正範：児童文化財を用いた活動が保育実習生の心理面・行動面に与える影響－障害者支援施設における施設実習での実践から、松本短期大学研究紀要、24、pp.3-10、2015
- 八田清果・大下二三子・金森由華：障害児・者施設イメージに関する一考察－本学学生の施設実習前アンケート調査より、滋賀文教短期大学紀要、17、pp.55-66、2015
- 松倉佳子・若林ちひろ：障害者支援施設における保育士の専門性に関する研究(1) 保育士養成課程における施設実習からの検討、清和大学短期大学部紀要、41、pp.33-39、2012
- 野田敦史：医療型障害児入所施設実習での経験が保育者アイデンティティに及ぼす影響、未来の保育と教育－東京未来大学保育・教職センター紀要－、2、pp.37-44、2015
- 尾島万里・小野里美帆・杉本直子：保育士養成における学生の障害児・者に対する意識変化－施設実習を

- 通して一、洗足論叢、34、pp.35-43、2005
- 岡部康成・齋藤雅英：知的障害児（者）に対する接触経験による偏見の低下—保育士・幼稚園教諭養成課程における施設実習の教育的効果—、浜松学院大学研究論集、6、pp.141-146、2010
- 小野里美帆・尾島万里：保育士養成における学生の障害児・者に対する意識変化（2）講義及び教育・保育実習を通して、洗足論叢、35、pp.109-117、2006
- 田中淳子・須河内貢：知的障害者に対する援助経験による態度変容に関する基礎的研究、岡山学院大学・岡山短期大学紀要、27、pp.59-67、2004
- 若林ちひろ・松倉佳子：障害者支援施設における保育士の専門性に関する研究（2）保育士養成課程における施設実習からの検討、清和大学短期大学部紀要、41、pp.41-45、2012
- 全国保育士養成協議会編：保育実習指導のミニマムスタンダード、北大路書房、2007